

物事の本質マンガで追究

研究は面白い
大学教員に聞く

23

北広島市にある星槎道都大学の竹内美帆専任講師。美術学部デザイン学科は、マンガ研究・美術教育、メディア論が専門。マンガ研究をめぐっては、2001年に日本マンガ学会が発足し、学術的対象として扱う流れが生まれてきたという。「北海道のマンガ文化を活性化させていきたい」と話す竹内講師に、研究内容などを聞いた。(聞き手・安藤有紀)

究している。既存の学問領域における方法論や知見をマンガに当てはめるのではなく、マンガを対象とすることで既存の常識を覆していくことを目指している。マンガを教育にどう生かすかということも研究テーマの一つ。

「専門のマンガ研究とは。マンガを取り囲む環境や文化、表現の特性、私たちがどうマンガを認識し関わっているかなどを研

究している。既存の学問領域における方法論や知見をマンガに当てはめるのではなく、マンガを対象とすることで既存の常識を覆していくことを目指している。マンガを教育にどう生かすかということも研究テーマの一つ。

ある。



ドイツ・ライプツィヒ大での授業。「はだしのゲン」ドイツ語版を読み討論

「当時まだ京都精華大に博士課程がなかったこともあり、社会に出て自分の世界を広げたいと考えた。教育の現場で働いたことほども大きな経験になり、文化庁のメディア芸術デジタルアーカイブ事業などにも携わった。ドイツでは日本学科の授業を担当、「はだしのゲン」など日本のマンガを取り上げて討論した。日本のマンガと海外のコミックスでは表現や読み方が異なるため、学生と現地調査も行った。

「大学の講義で大切にしていることは。学生には、知らないマンガや読んだことのないマンガにもたくさん触れ、授業を通して「当たり前を疑う」という経験をしてもらいたい。異文化について想像力を養い、多様なものの見方ができるよ

うになつてもらえれば。

「マンガ研究の魅力は。そもそもマンガは研究の対象になると思われておらず、学術的な研究から最も遠い印象がある。そういう部分に魅力を感じる。マンガは多くの人に開かれ、親しみのあるメディアでありながら、複雑な概念や感情、答えのない問題など、あいまいで揺れ動くものをそのままの形で読者に届けられるところが興味深い。世代・立場を超えてコミュニケーションできる可能性や物事の本質も含んでいる。研究に関わる人々も考え方が柔軟でフラットに接することができる人が多く、それも魅力。

「中高生へのメッセージを。自分の好きなことや夢中になれるものを大事にしてほしい。私も中高生時代に夢中になってマンガを読んでいた経験が今の仕事の基礎になっている。現時点では将来何の役に立つかわからなくても、「楽しい」「面白い」と思う感性を信じ続けてほしい。北海道には自由な空気があり、新しい挑戦を受け止めて応援する懐の広さがあると感じる。北海道出身のマンガ家も多い。中高生の頃は都会への憧れがあり地方に住んでいると格差を感じるかもしれないが、実は北海道にいたことが一つのアドバンテージになる。今この場でできることを大切にもらいたい。

星槎道都大学

「竹内美帆専任講師(38)」



たけうち・みほ 札幌市出身、横浜国立大学卒。2009年同大大学院教育学研究科メディア芸術専攻修士課程修了。小学校や大学の非常勤講師、ドイツ・ライプツィヒ大学日本学部客員研究員などを経て、18年京都精華大学大学院マンガ研究科理論専攻博士後期課程修了。22年に星槎道都大へ。今年4月から現職。

「大学には、人生を懸けて日夜、研究に打ち込む研究者がいる。彼らの、中高生に向けたメッセージを紹介する。